

主な展示資料

(1) 手仕事から電気の利用へ

洗濯板 たらい 昭和 館蔵

洗濯を手でしていた頃の道具です。たらいに水と洗濯物を入れ、洗濯板に水を吸った衣類を一枚ずつ広げて洗っていました。

洗濯板の表面には溝がきざまれています。溝は石けん水をためる、洗濯物の汚れを落とす、洗濯物がずり落ちないようにする役割をしています。

たらいは短冊形に薄く切った板を縦に並べ合わせ、底を付け、「たが」でしっかりとしめて、水が漏れないように作られています。



電化

電気洗濯機 昭和30年発売 館蔵

電気洗濯機は1930年(昭和5)に、国産の第一号機が登場しましたが、高価なため、ごく限られた人しか購入できませんでした。多くの人々が使用するようになるのは、1950年代後半(昭和30年代)以降です。

電気洗濯機の普及により、汚れた衣類と水、洗剤を入れて、タイマーをセットすれば、洗濯できるようになりました。洗った衣類はローラーの間にはさんで、ハンドルを回して脱水しました。



手回しミシン 明治~昭和 館蔵

アメリカのシンガーミシン社製の手回し式ミシンです。「ミシン」という名は、英語名の「ソーイング・マシン」の「マシン」が日本で訛^{なま}って呼ばれるようになったそうです。

ミシンが使われるまで、裁縫は針と糸で一目ずつ縫う根気のいるものでした。このミシンは、右手でハンドルを回し、左手で布を操って使いました。



電化

電動ミシン 昭和50年頃 個人蔵



1975年(昭和50)頃使われていたブラザー工業社製の電動ミシンです。手回しミシンや足踏みミシンは、手足での操作に慣れる必要がありましたが、モーターが組み込まれたこのミシンでは、電動で楽に作業できるようになりました。

縫う速度はフットペダルの踏み方によって、調節しました。

(2) 明かりから熱源へーガスの道具ー

ガスストーブ 昭和40年代 館蔵



スケルトン(耐火粘土)にバーナーの炎を当てて赤熱させる輻射式の暖房器具で、スケルトン式ストーブと呼ばれます。アメリカのハンフレー社の製品が、大正時代に輸入され、日本でも模倣して製造されるようになりました。

スイッチ(圧電式自動点火)で火を付け、安定した火力で部屋を暖めることができるとともに、自分で燃料を補給する必要がありませんでした。

(3) 手書きから活字の印刷へ

謄写版 昭和50年代 館蔵



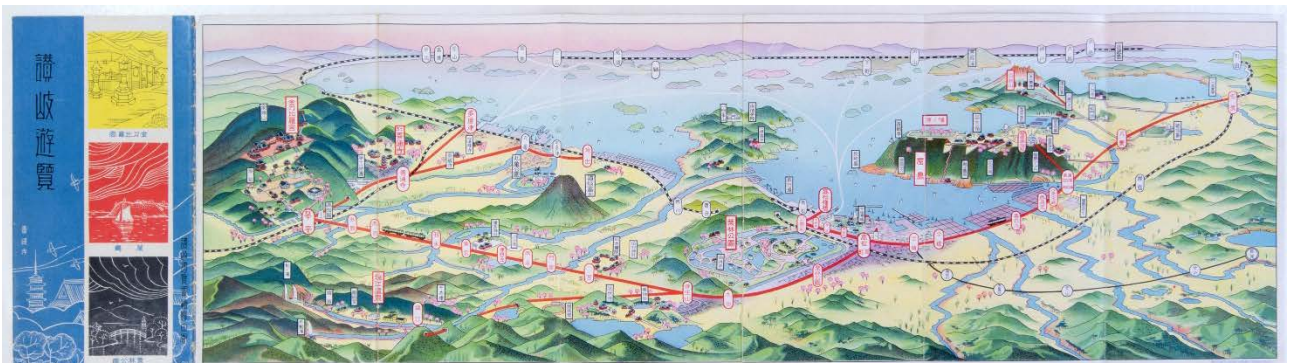
1980年代前半(昭和50年代)頃までは、学校、会社などや個人で印刷する方法として、謄写版印刷が広く行われていました。

文章や絵を書いた原紙を謄写版印刷器のスクリーン内側に付け、印刷用紙を重ねて、スクリーン外側からローラーでインクを付けると刷り上がります。原紙に書かれた文字や絵の部分をインクが通って印刷されるのです。

謄写版はヤスリの上に置いた原紙に鉄筆で書くと、「ガリガリ」という音がすることから、「ガリ版」とも呼ばれました。

(4) くらしと鉄道 ー高松の鉄道のうつりかわりー

讃岐遊覧 昭和前期 館蔵



1889年(明治22)、讃岐鉄道によって丸亀ー多度津ー琴平間に香川県初の鉄道が開通しました。その8年後の1897年(明治30)、丸亀ー高松間が開通し、高松市の鉄道が始まりました。

一方、高松市の電車は1911年(明治44)、今橋ー志度間が開通したことに始まります。続いて、

